

Title	名詞・動詞の被覆形・露出形の研究
Author(s)	蜂矢, 真弓
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/57866">https://hdl.handle.net/11094/57866</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	蜂 矢 真 弓
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 23318 号
学位授与年月日	平成21年9月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	名詞・動詞の被覆形・露出形の研究
論文審査委員	(主査) 准教授 岡島 昭浩 (副査) 教授 金水 敏 教授 荒木 浩

#### 論文内容の要旨

本論文は、有坂秀世のたてた被覆形／露出形というものについて、詳しく論じるというものである。特に、通時的に見て行く点、露出形の用法に着目した点、名詞の被覆形／露出形と、動詞の被覆形／露出形の差を見極めようとした点に主眼がある。

第一篇「名詞被覆形・露出形」は、第一章「複合名詞における名詞被覆形・露出形」、第二章「複合名詞における連体助詞を伴う名詞被覆形・露出形」からなるが、このうち第一章は、第一節「名詞被覆形・露出形の型の通時的相違」、第二節「名詞被覆形「コ〔木〕」の様相」からなる。第二篇「動詞被覆形・露出形」は、第一章「派生語における動詞被覆形・露出形」、第二章「複合語における動詞被覆形・露出形」からなる。第三篇「名詞被覆形と動詞被覆形」は、第一章「名詞被覆形と動詞被覆形の状況」、第二章「名詞被覆形と動詞被覆形の用法」、第三章「派生と複合の性質」、第四章「被覆形の消長」からなる。B5判142頁、400字詰め換算で約350枚に相当する。

第一編第一章第一節では、アメ・アマ(雨)のように、露出形がエ列(被覆形がア列)となるⅠ型と、キ・コ(木)のように、露出形がイ列(被覆形がオ列かウ列)となるⅡ型とに分けて、時代による変化の調査を行った結果、Ⅰ型・Ⅱ型共に、時代が下るにつれて被覆形の勢力が弱まり、露出形の勢力が強まっていくが、Ⅰ型とⅡ型とを比較すると、Ⅱ型の方が露出形の勢力増が早く、Ⅰ型の方はⅡ型に較べて被覆形が勢力を保つ、ということを示した。同第二節は、Ⅱ型に着目したもので、その時代ごとの様相を追ったものであるが、そのうち、キ・コ(木)の占める割合の多いことを指摘し、Ⅱ型における露出形の勢力増は、キ・コを除くと一層はやく現れたことになる、ということを示した。同第二章では、ノ・ツ・ナといった連体助詞の有無と、露出形／被覆形の現れ方に着目し、その挿入や脱落についての様相を明らかにしている。特に同第二節の「連体助詞を伴う名詞被覆形による擬古的複合名詞」は、連体助詞が挿入される擬古的な造語の様相を明らかにしたものである。

第二編は動詞の被覆形・露出形に着目したものである。第一章では、接尾辞が付い

場合の形を、考察の対象にしている。派生の元、複合動詞の前部要素となっているものが露出形（イ列音・エ列音）であられるものを拾い上げ、それが露出形となっている理由を探ろうというものである。動詞活用の発展（四段動詞と二段動詞の前後関係）、形容詞のク活用とシク活用についても述べられる。

第三編では、第一編での名詞、第二編での動詞の分析を受けて、総合的な分析を目指した論が展開される。動詞が、被覆形・露出形から発展して行ったのに対し、名詞の被覆形は発展性を失っていった、と纏められる。

#### 論文審査の結果の要旨

本論文は、有坂秀世の定義にかかる被覆形／露出形を、主に造語の観点から見直したものの、また造語の際の露出形の用法に着目したものと見ることが出来る。特に、第一編において、I型とII型とに分けてこれを論じ、通時的に見て、I型における被覆形の勢力後退が、II型に比して遅いものであることを、時代を通じて用例を多く集めて整理し、具体的に示した点が評価できる。さらに、これに伴うこととして、ノ・ツ・ナなど連体助詞に相当するものがある場合における、その直前である前部形態素の被覆形／露出形について、各時代に渡って用例を集め、擬古的な造語と見られるものにまで考察を及ぼしていることも、評価できる点である。

第二編においては、動詞の被覆形／露出形に着目して論を進めている。日本語史上の大きな問題にかかわる論であり、まだ説得力を持つ論にまでは到っていないものの、指摘された事実については有意義なものがある。

名詞の被覆形／露出形と動詞の被覆形／露出形を比較考察する第三編も、第二編を受けて書かれた部分などには問題が残るが、第一編で明らかになった名詞における被覆形の意味を、動詞との比較で考えようとした点に意義がある。

全体を通しての問題点もある。その一つとして、論述用語の厳密さが足りないことがあげられる。たとえば、本論文における重要な問題に関わる「造語」「造語力」「変化」などの用語が、定義がなされずに使われている点などである。また、調査対象文献の選定において、文献の性質を考えた選定がなされるべきだったのではないか、用例が見いだされた文献の性質から、その用例の持つ意味を見極める必要があったのではないか、という点も、惜しまれるところである。さらに、被覆形・露出形という観点から眺めることに専念したために、本論文で取り上げている現象についての、他の立場からの先行研究に対して、十分な目配りがなされておらず、そのことによって本論文の位置づけがわかりにくいものとなっているのも残念な点である。

以上のような問題点はあるものの、本論文が取り上げて明らかにしたものは有意義であり、今後における、複合語の語形研究に発展性のあることを感じさせるものとなっている。

2009年8月18日に本論文の公開口頭試問を行った。これもふまえ、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。